

【新教育指針】

敗戦のあと、教師たちは茫然自失と混乱の中にいました。そんな一九四六年五月から、文部省「新教育指針」が発行されました。これは新教育の基本方針に関する教師向けガイドブックで、「日本は今どんな状態にあるか」「どうしてこのやうな状態になったのか」「これからどうしたらよいか」など教師たちがいま、何を考え話し合うべきか呼びかけたものでした。

第二部が新しい民主主義の教育方法の紹介になつていて、新日本建設に関わる時事問題や学校生活に関する問題から教材を選び、それを児童の生活と興味に即しつつ、自主的学習から協同学習へと発展させるように取り扱うことがあげられ、「討議法」の提案がありました。

この民主主義の方法、ほんものの問題に挑む生活の問題解決学習を、児童生徒だけでなくまず教師からはじめることを呼びかけたものとも言えます。これをきつかけに各学校で議論が白熱していきます。第一部では、「人間性・人格・個性の尊重」を考えることが提案さ

生活教育 キーワード

れ、「人間のほんとうの願ひは何であるか」「これからの日本はどんな国であるべきか」「教育者はどこに希望と喜びとを見出すべきか」などの「たたき台」が書かれています。これらの議論の蓄積と実践と運動が、その後の、日本国憲法、そして教育基本法に実を結んでいきました。

私たちコア・カリキュラム連盟（日生連の前身）とのつながりという点、実はこの「新教育指針」の原案を書き上げたのが、当時、教科書局にいた東京文理科大学の石山脩平で、このあとコア・カリキュラム連盟をつくって初代の委員長になります。「新教育指針」を「ガリ切り」の練習に使っているとき、第一部最後に「ペスタロッチ」が出ているのを発見して感銘を受けたというのが、のちの日生連第八代委員長になる丸本政臣でした。みんな文部省は廃止されると思っていたようで、カリキュラムを自分たちでつくりはじめたのです。

（研究部・加藤聡二）

参考文献

①伊ヶ崎暁生・吉原公一郎編著『戦後教育の原典1 新教育指針』現代史出版会、一九七五年。